

小学校体育における運動遊びによる導入が児童の 運動への好意的感情に及ぼす影響

—運動の好き嫌いの生成要因に着目して—

学籍番号 219338

氏名 河合 和司

主指導教員 小川 剛司

副指導教員 井上 功一

1. 背景

子どもの体力の低下と二極化が指摘されており、平成29年に告示された小学校学習指導要領(2017)では、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童に配慮し、体力や技能の程度にかかわらず、全ての児童が楽しく、安心して運動に取り組むことができるようにし、その結果として体力の向上につながる指導の改善を図ることが挙げられている。そのため、より体育授業の充実を目指して、小学校体育(運動領域)まるわかりハンドブックなど、各段階の指導内容や指導上の留意点をまとめた教師用の資料も作成されているが、準備運動の明確な実践方法までは、学習指導要領や指導資料にも示されていないのが現状である。これらを踏まえて、小学校の体育授業では、運動遊びによる授業導入が実践されはじめている。これまでに運動遊びによる授業導入を通して、身体活動量を増加したこと(春日ら, 2020)や心理社会面が3か月間、安定に高く推移したこと(佐藤, 2019)が報告されている。しかしながら、運動遊びによる授業導入によって、実際に好意的感情を育てているのかまでは明らかでない。

運動能力の高さは運動好きおよび嫌い双方に影響するものの、協働や運動による爽快感は運動好きに関連する一方で、性格や評価のあり方が運動嫌いに関連し、運動好きと運動嫌いの生成要因は必ずしも一致しない。したがって、運動への好意的感情を高めるためには、嫌悪感を取り除くようなネガティブアプローチだけではなく、ポジティブアプローチも必要であると考えられる。

そこで、本研究では、小学校体育授業において、運動の好き嫌いの生成要因に着目した運動遊びによる導入実践を行い、好意的感情を育てるのか、その効果を検証することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象

本研究の対象は、大阪府下の小学校の第2学年3学級児童96名、第3学年3学級児童91名の合計187名であった。

2.2 授業導入の実践

導入実践は、担当学年の教員と相談の上、第2学年でマットを使った運動遊び、跳び箱を使った運動遊びの運動種目時において実施した。第3学年では、ベースボール型、幅跳びと鉄棒運動の運動種目時において実施した。授業導入の実践頻度は、行事や祝日等を除いて、第2学年で1週間に1回で合計7回、第3学年で2カ月間に2学級で4回、1学級で1週間に1回で合計7回実施した。導入実践は、各授業開始から10・12分間を用いて「運」「表現」「協同」要素を含んだ運動遊びを実施した。

2.3 調査・測定項目

本研究では、運動遊びを用いた授業導入による好意的感情の即時的・経時的変化を測定するため、好意的感情に関する質問紙を作成した。作成した質問紙を授業導入前後と実践期間前後に調査を実施し、運動遊びによる授業導入が、好意的感情に即時的・経時的に高めるために有効かについて検証を行った。授業導入前後に調査した質問項目は、事前事後間においてウィルコクソンの符号順位和検定を行った。導入実践前後に調査した質問項目は、事前事後間において Mann-Whitney の u 検定を行った。本研究の統計処理における有意水準は5%未満($p < 0.05$)とした。

3. 結果と考察

運動遊びによる授業導入の効果として、第2・3学年で導入直後の気分および意欲が授業前と比較して有意に高まった($p < 0.01$)。また、実践期間を通して、第2学年では、運動への好意度が有意に高まり($p < 0.01$)、第3学年では、有意差は見られなかった。第3学年は、実習日程の都合上、第2学年、先行研究と比較しても少ない実践回数となってしまうが、導入実践後での運動への好意度が増加していることから、運動遊びによる授業導入を継続して実践していくことが、運動への好意度を高めるために必要であると考えられる。このことから、運動遊びによる授業導入は、好意的感情を即時的・経時的に高めるための有効な手法であると考えられる。

運動遊びによる授業導入を現場に適用していく上で、本研究で活用した運動遊びの教材に価値があるかどうか検討していくことが必要である。課題の解決に向けては、他の運動遊びによる好意的感情の変化を見ることで、より効果的な授業導入につながるであろう。

本研究では、実践期間による好意的感情への影響だけでなく、授業導入前後での質問紙調査をしたことで、導入実践による好意的感情を適切に評価することができたため、運動遊びによる授業導入の効果を十分検討できたものと考えられる。このように、運動遊びによる授業導入によって好意的感情を即時的・経時的に向上できたことは、児童が運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることになると考える。